



Title	日本漢字辞書研究の資料と方法に関する基礎的研究 [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	劉, 冠偉
Citation	北海道大学. 博士(文学) 甲第14572号
Issue Date	2021-03-25
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/81135
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	theses (doctoral - abstract and summary of review)
Additional Information	There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL.
File Information	Guanwei_Liu_review.pdf (審査の要旨)



[Instructions for use](#)

学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）

氏名： 劉 冠 偉

主査 特任教授 池 田 証 壽
審査委員 副査 教 授 加 藤 重 広
副査 教 授 富 田 康 之

学位論文題名

日本漢字辞書研究の資料と方法に関する基礎的研究

・当該研究領域における本論文の研究成果

近年、国語学の分野において電子化された言語資源（テキスト、画像、音声、動画）を活用する研究が増加している。それらは現代語にとどまらず歴史的文献を対象とした「日本語歴史コーパス」（国立国語研究所）に広がっており、これを利用した学術論文が査読誌に掲載されることも多くなった。しかし、『類聚名義抄』に代表される日本漢字辞書は、古写本であり、その項目構造が現代の漢和辞典とは大きく異なるため、十分な研究がなされていなかった。また、言語資源の電子化と公開、利用ツールの開発には多大の労力を要するのに、研究業績として適切に評価されない状況が続いていた。この状況を改善すべきとの声は、徐々に大きくなっている。このようなことを背景に、日本漢字辞書研究の資料と方法をはじめて提起しようとしたのが本論文である。この研究の遂行には、石塚晴通氏（北海道大学名誉教授）を代表とする「漢字字体規範データベース」を手本とし、その再構築・公開を支援した経験を生かしている。

本論文が対象とした日本漢字辞書は、中古、中世、近代から一つずつ選んでいる。平安時代成立の観智院本『類聚名義抄』、室町時代の夢梅本『和玉篇』、大正時代の上田万年ほか編『大字典』である。『類聚名義抄』は、「平安時代漢字字書総合データベース（HDIC）」プロジェクトの一部として言語科学講座で構築したもの、『和玉篇』は高橋大希氏が本学大学院提出の修士論文のために構築したもの、『大字典』は本論文申請者が構築したものである。これらのデータベースの公開と検索ツールの開発は、本論文申請者が行っている。

本論文は、人文学と情報学との連携をはかることを目指した研究として独創的な内容を持つ。一方、従来の人文学分野の論文の枠組みから外れる部分を含んでいる。そこで、従来の研究の検証、電子データ化による新たな発見、研究資料とその成果の可視化の三点から、本論文の成果を次に述べる。

第一には、従来の研究の検証である。これまでの国語学における文献研究では、複雑で時間を要する手続きにより結論を導くことが多かった。そのため、後の研究者が同様の手続きを取ろうとしても容易ではなかった。「日本語歴史コーパス」の出現により文法研究や語彙研究では飛躍的な改善が図られたが、国語学の重要資料である古辞書、抄物などの漢字を多用する文献を扱うには、資料の入手と本文解読に費やす時間が多く、内容分析とその電子化が不十分であった。本論文では、『類聚名義抄』、『和玉篇』、『大字典』の三書に共通する和訓（訓読み）が977語であることを明らかにした。これを基準として他の漢字辞書の収録漢字とその和訓を分析する基礎資料が得られた。

第二には、日本漢字辞書の項目構造に即したマークアップを行い、それを利用した新見を提示したことである。具体的には観智院本『類聚名義抄』の掲出項目の性質を、基本項目と拡張項目、熟字項目と異体項目、単字形式と複字形式に分け、さらに注文種類を音注・義注・字体注・和訓の4要素に分けてマークアップする手法を開発し、掲出項目での符号の使用と注文での使用文字種から、掲出項目の性質が規定されていることを見出した。これは従来の研究者が気づけなかったことを、実際の数値で示した点に意義がある。

第三には、日本漢字辞書に関する可視化である。これは閲覧ソフトウェアである HDIC Viewer とそれに組み込まれる各種ツールの開発・公開、各種デバイス（PC、スマートフォンなど）でのインターフェイス対応、Unicode に未登録文字の GlyphWiki による作字と実装である。この成果は、広く国内外の漢字研究に関わる研究と教育に貢献するであろう。

・学位授与に関する委員会の所見

本論文の成果は、訓点語学会と人文科学とコンピュータ研究会などで口頭発表と論文公刊を行い、国立国語研究所「言語資源活用ワークショップ」、京都大学人文科学研究所「東洋学へのコンピュータ利用」での発表を通じて人文学諸分野および情報学の研究者からの批判を仰ぎ、一定の評価を得ている。口頭試問に際しては、情報処理に関連する用語が説明なく使われるなど、文章表現に改善の余地が大きい点、論文全体の構成がアンバランスな点、漢字辞書研究の考察に不足する点などが指摘された。電子化された言語資源の構築・公開に、積極的な評価がなされることがなかったことから必然的に生じる問題点であり、これらの諸点の改善は十分に見込め、今後、新たな研究分野を開拓する成果として評価されることが大いに期待される。

以上の審査結果に基づき、本審査委員会は、全員一致で本学位申請論文が博士（文学）の学位を授与されるにふさわしいものであると判断した。